

島田已久馬旧蔵資料目録（暫定版）

てんぷら

本目録は、二〇一八年度に法政大学能楽研究所蔵となった島田已久馬旧蔵資料について整理・分類したものである。

島田已久馬（一八八九～一九五四）は大正・昭和前期に活躍した能楽笛方の能楽師である。熊本県で生まれ、十六歳の頃、一噌流笛方正木利三郎に入門した。『能楽』『謡曲界』『能楽画報』等に掲載された関連記事や能番組をみると、明治四十一年（一九〇八）の頃より、友枝氏や桜間氏の引き立てを受け地元の神社主催の舞台等で笛を吹いていたことが認められる。工業学校卒業後は漆器製造所に勤めたが、明治四十四年（一九一七）に上京し、一噌流の笛方として幸清流小鼓方幸清次郎（一八四五～一九一七）らと九臯会等に出勤していた。しかし、謡本の発行をめぐって九臯会の観世喜之（一八八五～一九四〇）が観世家より破門扱いとなったため、同年九月、島田も十二世宗家一噌又六郎（一八七二～一九三八）より破門された。清次郎らと九臯会にて細々と活動を続け、大正四年（一九一五）に九臯会が観世流に復帰すると、島田も破門を許された。その際、改めて又六郎より入門免状を授けられ一噌流へ再入門する形をとったことが島田已久馬旧蔵資料より判る。十三世宗家一噌鏝二（一九一〇～四五）が戦死した後は、昭和二十三年（一九四八）より一噌流宗家代理を務めた。東京を中心に活動し、強く美しい音色に定評があった。昭和二十八年度に文化財保護委員会が作成した幸祥光・川崎九淵の記録音源に島田の演奏も収録されているが、そこからは現在の一噌流とは少し違う奏法も窺える。

島田已久馬旧蔵資料は囃子手付類が中心である。笛手付がもつとも多いが、清次郎に小鼓を師事していた関係で小鼓手付も数多く含まれる。手付は厚紙カード、小型のメモ帳、手帳、能番組の裏、紙片等に雑多に記されるが、島田が実際に勤めた舞台の演出事項を詳細に書き入れたものもみえ、復曲・新作の上演に関する資料も含めて大正・昭和期の能の演出の具体相を知るうえで貴重な資料といえる。手付には江戸時代の演出事項を写したのも存在し、なかには江戸中期の七世宗家平政香がまとめた唱歌付（序文「寛政三年辛亥秋七月平政香」）を筆跡まで真似て精密に書写したものも含まれており、宗家の伝承に強い関心やこだわりを持っていたとみえる。手付以外には又六郎や幸清次郎よりの免状・相伝状、一噌流関連資料、謡本、能番組、書状等もあり、大正・昭和前期の一噌流の活動実態の一端も知ることができる。

目録ではこれらの資料を内容に応じて、A笛手付、B小鼓手付、C大鼓・太鼓手付、D免状・相伝状の類、E昭和期一噌流関連資料、F型付、G謡本、H名簿、Iその他に分類した。A笛手付は点数が多いため、A1頭付、A2唱歌付、A3新作・復曲関連、A4狂言アシライ、A5他流儀手付、A6笛伝書に細分化した。D免状・相伝状の類もD1笛、D2小鼓に、G謡本もG1謡本、G2狂言台本の下位区分を設けた。今回公開するのはAからHまでで、それ以下は順次、公開する予定である。

なお、本目録は二〇一九～二〇二〇年度公募型共同研究「能楽研究所蔵及び国立能楽堂蔵一噌流伝書の調査研究・演奏技法及び江戸期地方伝承の解明にむけて」および二〇二一～二二年度公募型共同研究「一噌流の伝承研究・島田已久馬旧蔵資料と国立能楽堂蔵一噌八右衛門家資料の調査」の調査に基づく。解題は森田都紀と高桑いづみが担当した。島田の経歴の詳細は別途、論文として発表する予定である。

凡例

- 1 曲名及び囃子事名は、岩波講座『能狂言別巻能楽図説』（岩波書店、一九八七年）、東洋音楽学会編『能の囃子事』（東洋音楽選書4、音楽之友社、一九九〇年）に従って統一名称を用いた。ただし、曲名に関しては流儀独自の表記を表に出し、統一名称を「」に入れて併記した。また、狂言『笛会釈』頭付（A4・1）のように鷺流以外の資料がない場合も、資料が記載する名称を表に出し、統一名称を「」に入れて併記している。名称に関しては、旧字体は標準字体に統一した。ただし、「檜」等の旧字体で通行している若干の文字は、慣行に従って旧字体のままとした。
- 2 解説中の曲名には「〜」、囃子事名には「」を付したが、所収曲の項ではなにも付けていない。ただし、『重習書留』（A2・4）のように曲名と囃子事名、小書名が併記されている場合は読みやすさを考慮して曲名に「〜」を付した。
- 3 資料の寸法は縦×横の形式で示した。箱の類は縦×横×高さを、卷子本の場合は紙高（縦）のみを記した。単位はmmである。

A 笛手付

A1 頭付

A1-1、紺色表紙 九十九番 笛頭付

袋綴（218×150）。題箋はあるが、文字は薄く読めない。外題・内題なし。墨付百四十九丁。年記なし。目録二丁。目録の下に「素水」の印あり。最終丁に「笛方 助三郎」とあったのを白滅。助三郎については不明。曲の冒頭より詞章を一つ書きで抜き書きし、手の名称を詞章の横や下に朱で記す。ところどころ振り仮名も朱で付す。本文の筆者は不明だが、欄外に、島田によると思われる鉛筆のメモ書きがみられる。

【所収曲】高砂、弓八幡、志賀、難波、老松、呉服、養老、放生川、白楽天、白髭、賀茂、氷室、大社、寢覚、源太夫、佐保山、嵐山、岩船、玉井、和布刈、右近、竹生島、金札、絵馬、九世渡「九世戸」、伏見、江島「江野島」、鶺鴒祭、淡路、不二山「富士山」、東方朔、鶴亀、皇帝、道明寺、輪蔵、巻絹、蟻通、室君、雨月、西王母、浦島、松尾、御裳濯川「御裳濯」、田村、八島、兼平、えひら「箴」、頼政、忠則「忠度」、敦盛、実盛、道盛「通盛」、清経、経政、朝長、知章、俊成忠度、ともへ「巴」、生田敦盛、景清、碓潜、橋弁慶、鶺鴒、熊坂、女郎花、項羽、通小町、殺生石、土蜘蛛「土蜘蛛」、山姥、鉄輪、正尊、船橋、阿漕、花筐、百万、柏崎、三井寺、桜川、隅田川、浮舟、玉かつら「玉葛」、善知鳥、藤渡「藤戸」、源氏供養、三山、籠太鼓、護法、撰待、竹雪、綾鼓、常陸帯、草薙、蟬丸、代主、逆鉾、鶏竜田、住吉詣、須磨源氏

A1-2、紺色表紙 囃笛手付 頭付

袋綴横本（75×165）。題箋「囃笛手付 全」。墨付百五丁。あとに遊び紙八丁。年記なし。最終丁に「島田図書」の角印あり。冒頭に目録が六丁あり、三部に分けて百九十六曲の曲名を列挙する。目録の曲名の下には、その曲で使われる主な囃子事の名称を朱で記す。目録最終曲（狸々）のあとに「右此番但ハはやニハいたしたし不申」と朱で注記した上で別に目録を立て、「鶺鴒祭」以下三十七曲を掲げるが、実際に記載があるのは前半の「朝顔」まで。本文中は詞章を一つ書きで抜き書きし、その下に手の名称を朱で記す。

【所収曲】目録は次の通り。高砂、弓八幡、志賀、難波、老松、呉服、養老、放生川、白楽天（料紙欠損）、白鬚、加茂「賀茂」、氷室、大社、寢覚、源太夫、佐保山、嵐山、岩船「岩船」、玉井、和布刈、右近、竹生島、金札、絵馬、九世戸、伏見、江島「江野島」、淡路、富士山、東方朔、鶴亀、皇帝、道明寺、輪蔵、巻絹、蟻通、室君、雨月、西王母、浦島、松尾、御裳濯川「御裳濯」、代主、逆鉾（以上第一部四十四曲）。田村、八島、兼平、箴、頼政、忠則「忠度」、敦盛、実盛、通盛、清経、経政、朝長、知章、俊成忠則「俊成忠度」、生田敦盛、鶺鴒、熊坂、女郎花、項羽、通小町、殺生石、山姥、鉄輪、船橋「船橋」、阿漕、花筐、百万、柏崎、三井寺、桜川、隅田川、浮舟、玉葛、善知鳥、藤戸、源氏供養、三山、籠太鼓、護法、綾鼓、鶏竜田（以上第二部四十二曲）。東北、芭蕉、江口、楊貴妃、千手、采女、井筒、野々宮「野宮」、熊野、松風、半菰、夕顔、班女、仏原、二人静、雲雀山、羽衣、六浦、杜若、西行桜、遊行柳、誓願寺、小塩、雲林院、葛城、吉野静、草紙洗、藤、胡蝶、陀羅尼落葉、二人祇王「祇王」、空蟬、高野物狂、弱法師、竜田、三輪、梅枝、天鼓、富士太鼓、唐船「唐船」、邯鄲、三笑、豊干、枕慈童、自然居士、東岸居士、花月、放下僧、芦刈、盛久、春栄、小袖曾我、七騎落、小督、松虫、錦木、安宅、元服曾我、黒塚、葵上、是界、鞍馬天狗、車僧、張良、春日童神、小鍛冶、船弁慶、紅葉狩、野守、鶺鴒、昭君、谷行、歌占、求塚、一角仙人、国栖、松山鏡、竜虎、加茂物狂、現在鶴、千引、鱗形、合浦「合浦」、大瓶狸々、吉野天人、飛鳥川、大蛇、絃上、海人、融、当麻、須磨源氏、狸々（以上第三部九十三曲）。鶺鴒祭、景清（記事ナシ）、碓潜、橋弁慶、土蜘蛛「土蜘蛛」、正尊、竹雪、舍利（記事ナシ）、常陸帯、草薙、蟬丸、住吉詣、

落葉、朝顔、大会、錦木、夜討曾我、羅生門、檀風、咸陽宮、大仏供養、藍染川、雷電、土車、池贄、鳥追舟「鳥追舟」、調伏曾我、禪師曾我、関原与市、忠信、飛雲、満仲、第六天、水無瀬、俊寛、錦戸、烏帽子折（以上第四部の三十七曲）。景清、舍利、及び大会以降は目録に曲名がみえるだけで実際の記述はないが、そのあとに遊び紙が多くあるので、記述する予定だったか。

A1-3、革表紙笛頭付 二冊

大観世流謡本（150×70、明治四十五年観世清久再訂正、檜常之助発行兼印刷者、青木印刷所）天之巻・地之巻二冊の詞章の横に朱、鉛筆、色鉛筆などで手の名称や囃子事名、唱歌などを記す。この謡本は島田が大正二年に購入したもので、天の巻の裏見返しに「大正二年四月下旬／日本橋通わんやニテ求ム（亀の絵）」、地の巻の裏見返しに「大正二年四月下旬／日本橋通わんやニテ求ム 島田印（島田印の上に）素水印／東京牛込横寺町／島田巴久馬」と記載あり。

【所収曲】神歌、高砂、田村、江口、班女、鶺鴒、難波、兼平、千手、卒都婆小町、紅葉狩、老松、頼政、井筒、三井寺、天鼓、白楽天、実盛、楊貴妃、玉葛、融、養老、清経、采女、通小町、小袖曾我、竹生島、朝長、姨捨、柏崎、阿漕、志賀、鶴、大原御幸、梅枝、誓願寺、蟻通、忠度、熊野、遊行柳、藤戸、玉井、景清、杜若、二人静、安達原「黒塚」、賀茂、俊寛、松風、西行桜、浮舟、呉服、八島、鸚鵡小町、葛城、当麻、海士「海人」、鞍馬天狗、定家、咸陽宮、東岸居士、竜田、夜討曾我、夕顔、隅田川、雲林院、春日竜神、船橋、源氏供養、花筐、富士太鼓、皇帝、通盛、檜垣、桜川、山姥、氷室、善界、芭蕉、百万、船弁慶、右近、女郎花、関寺小町、自然居士、大会、三輪、安宅、東北、蟬丸、猩々、白鬚、盛久、仏原、善知鳥、小塩、邯鄲、殺生石、野宮、錦木、唐船、弓八幡、鉢木、羽衣、道成寺、竜虎、蘆刈、敦盛、木賊、葵上、輪蔵（以上天之巻）。寢覚、江野島代主、九世戸、逆矛、西王母、道明寺、経政、籬、巴、嵐山、正尊、巻絹、花月、鍾馗、項羽、橋弁慶、熊坂、小督、野守、張良、羅生門、鉄輪、藍染川、雲雀山、住吉詣、谷行、半部、禪師曾我、車僧、吉野天人、大仏供養、忠信、烏帽子折、大瓶猩々、鶴亀、和布刈、大社、東方朔、春榮、第六天、土蜘蛛「土蜘蛛」、舍利、小鍛冶、石橋、合浦、生田敦盛、草紙洗小町、六浦、松山鏡、金札、大江山、岩船、知章、俊成忠度、恋重荷、砧、鷺、望月、七騎落、弱法師、絃上、淡路、放下僧、吉野静、籠太鼓、錦戸、室君、碇潜、身延、枕慈童、飛雲、放生川、須磨源氏、胡蝶、松虫、一角仙人、三笑、鳥追船「鳥追舟」、藤水無月祓、哥占「歌占」、雨月、土車、撰待、国栖、雷電、絵馬、現在七面、昭君、楠露、笛の巻、木曾、梅、仲光「満仲」、高野物狂、菊慈童「枕慈童」、乱曲上ノ巻、乱曲中ノ巻、乱曲下ノ巻、三曲、三読物（以上地之巻。乱曲以下は頭付の加筆なし）。

A1-4、〈老松〉紅梅殿望月〈道成寺〉石橋〈頭付

折紙袋綴（150×203）。共紙表紙の中央に「老松紅梅殿／望月／道成寺／石橋 手附」と打書き。ただし記載順はこれとは異なる。墨付六丁。朱入り。詞章を一つ書きで墨書し、朱で手の名称を書き込む（但し末尾の〈石橋〉は墨書のみ）。墨・朱書ともに流儀による違いに触れる注記もあり。〈老松〉紅梅殿は、序の唱歌も記す。〈道成寺〉乱拍子の行道図は金春流と喜多流の両様を、「道成寺とは」から「急之舞」に移る箇所は幸清次郎流と幸五郎次郎流の両様を記す。年記・署名なし。筆跡が『習事手附』（A2-3）と同人か。【所収曲】金春流〈望月〉、〈老松〉紅梅殿、金春流〈道成寺〉、喜多流〈石橋〉

A1-5、喜多流〈石橋〉頭付

袋綴（246×170）。共紙表紙の中央に「石橋 手付」と打書き。内題「石橋 喜多」全二丁。詞章を一つ書きで抜き書きし、その下や横に手の名称を墨書。シテ方観世流について

は「真ノ来序で中入シテヲ送り込ミ間スミテ新たに来序」等、朱で注記と手を付す。年記・署名なし。島田筆か。

A116、「二噌流家元直筆 極秘 伯母捨 檜垣」頭付 二枚

「二噌流家元直筆 極秘 伯母捨 檜垣」と墨書した封筒の中に〈姨捨〉一枚(二枚継、198×536)、〈檜垣〉一枚(二枚継、198×826)を収める。年記なし。封筒の裏に「島田已久馬」とある。詞章を一つ書きで抜き書きし、その横に手の名称や唱歌を朱書する。〈檜垣〉では「習之一声」及び舞の三段オロシも記す。〈姨捨〉では、習ノ手の唱歌や注記を島田が鉛筆で加筆。

A117、〈伯母捨〉頭付

八割箋見開き(139×400)の裏に〈姨捨〉の頭付を鉛筆書き。内題「伯母捨」前場の記述は簡略化されているが、後場は詞章を一つ書きで抜き書きし、手の名称を添える。年記・署名はないが、島田の筆と認められる。習ノアシライについて具体的な唱歌は不記。

A118、宝生流〈石橋〉頭付

折紙(96×182)一枚(二枚継)。内題「石橋 宝生流」。冒頭に台の図を描く。詞章を一つ書きし、その横や下に手の名称を記す。中入り、「獅子」の舞い様についてはやや詳述。すべて鉛筆書き。年記・署名はないが、島田筆と認められる。

A119、頭付カード 百九十二点

厚紙カード用紙(82×124)。カードの表裏に鉛筆書き。縦書きと横書きが混在。挟み紙あり。年記なし。同じ演目を複数のカードで記す例もあり、体系的に記述されたものではない。島田が備忘のために記し、日々の舞台で実際に使用したものと考えられる。薄紙の挟み紙に追記した場合もある。

【所収曲】葵上、阿漕、芦刈、安宅、敦盛、海人、綾鼓、嵐山、蟻通、淡路、生田敦盛、一角仙人、井筒、岩船、鶉飼、雨月、右近、歌占(二枚)。うち一枚は三笑と同一紙)、善知鳥、采女、梅枝、雲林院、江口、箴(弱法師と同一紙)、絵馬、老松、鸚鵡小町(挟み紙)、大江山、大社、小塩(二枚)、大原御幸、女郎花(楠露と同一紙)、大蛇、杜若、景清(二枚)、花月、柏崎、春日童神、合浦、葛城、鉄輪、兼平(二枚)、賀茂、通小町、邯鄲、菊慈童「枕慈童」、木曾、砧、清経、国栖、楠露、熊坂、鞍馬天狗、車僧、呉服、安達原「黒塚」、源氏供養、絃上、元服曾我、恋重荷(挟み紙)、項羽、皇帝(俊成忠度と同一紙)、高野物狂、小鍛冶、小督、小袖曾我、胡蝶(二枚)、西行桜、鷲、桜川、実盛、三笑、七騎落、自然居士(二枚)、石橋、春栄、俊寛、俊成忠度(二枚)、鍾馗、昭君、正尊、須磨源氏、角田川「隅田川」、代主、西王母、誓願寺、是界、殺生石、蟬丸、千手、禪師曾我、草紙洗小町、卒都婆小町、大会(二枚)、大瓶狸々、当麻、高砂(三枚)、忠度、竜田、玉葛、玉井、田村、竹生島、忠霊(挟み紙)、調伏曾我、張良、土蜘蛛「土蜘蛛」、経政、鶴亀、定家、天鼓、藤栄「藤永」、東岸居士、唐船(二枚)。うち一枚が楊貴妃と同一紙、棹之掛)、東方朔(挟み紙)、東北、道明寺、融、木賊、巴、朝長、鳥追船「鳥追舟」、仲光(満仲、うち一枚は挟み紙、愁傷之舞)、難波、錦木、鶴、寢覚(二枚)。うち一枚は松虫と同一紙)、野宮、野守(二枚)、白楽天(挟み紙)、羽衣、半菰、橋弁慶、芭蕉、鉢木、花筐、班女、飛雲、雲雀山、氷室(二枚)。うち一枚は曲名の記載なし)、百万、笛之卷(橋弁慶と同一紙)、藤(二枚)。うち一枚は挟み紙)、富士太鼓、藤戸、二人静、船橋(二枚)、船弁慶、放下僧、巻絹、枕慈童(二枚)、松尾、松風、松虫(二枚)、松山鏡、三井寺、通盛、三山、三輪、六浦(枕慈童と同一紙)、和布刈、望月、求塚、紅葉狩、盛久、八島、山姥、夕顔(挟み紙)遊行柳、弓八幡、熊野、楊貴妃、夜討曾我、養老(三枚)。うち一枚が

挟み紙。うち二枚が水波之伝)、義経(挟み紙)、吉野静、吉野天人、頼政、弱法師、籠太鼓。

A1-10〈忠霊〉頭付

210×146。本文のみ印刷した〈忠霊〉の謡本(刊記不明。本文十一丁)に表紙と裏表紙を仮綴じで付け、ところどころに鉛筆でアシライや舞について記載した頭付。署名はないが島田筆と認められる。表紙に「昭和拾六年新作 十一月十一日相勤ム 華族会館於テ」とある。

A1-11〈義経〉頭付

210×148。観世流大成版謡本〈義経〉(昭和十七年八月、観世元正、檜書店刊。前付一丁。本文十丁。)の詞章の上に「高音」などアシライを朱で記す。便箋一枚を挟む。便箋には「昭和十七年四月十日試演の節の覚」として朱で狂言口開、ワキの出、前シテの出、中入りについて記し、末尾に「鏝」とある。頭付・便箋ともに一噌鏝二筆か。

A1-12、〈皇軍艦〉頭付

昭和十八年五月刊観世流大成版謡本〈皇軍艦〉(210×148。前付一丁。本文八丁)の詞章の上に「高音」などアシライを朱で記す。一噌鏝二筆か。

A1-13、〈時宗〉頭付

210×146。金春流謡本〈時宗〉(昭和十六年十一月、編著者金春光太郎、わんや書店刊。本文十一丁。)の詞章の上に「名乗不吹」「高音」「呂吹上」などアシライを朱や鉛筆で記した頭付。〈時宗〉は高浜虚子作・桜間金太郎節付の新作で、一丁表に「日本放送協会の依頼を受けて新作、昭和十五年十一月十一日、紀元二千六百年祝典挙行の当日放送された作品である。当日の演奏者は仕手桜間金太郎、脇宝生新、笛一噌鏝二、小鼓幸悟朗、大鼓川崎利吉、太鼓金春惣右衛門、間野村萬蔵の諸氏であった。更に昭和十六年十二月七日、右と同一の役者にて富士見町細川家能舞台に於て演能されることになった。昭和十六年十月三十日高浜虚子」とある。表紙の見返しに墨で「島田已久馬殿 一噌鏝二(花押)」。謡本に書き入れられた頭付のうち、朱書きは一噌鏝二筆、鉛筆書きは島田筆か。

A2 唱歌付

A2-1、平政香唱歌付

袋綴(266×190)。題簽・外題・内題なし。墨付六十三丁(うち二丁は後出の「盤渉序之舞」と「葛之音取」)。遊び紙が全体の半分以上を占める。年記なし。二丁表に「島田」の印あり。平政香がまとめた唱歌付(序文「寛政三年辛亥秋七月平政香」)の写しで、政香の筆跡を忠実に模して記している。末尾に「笛方/志満多已久馬識ス」とあり、島田による書写と認められる。序文、目次、凡例、唱歌付(舞之部・会釈之部・狂言会釈之部)を書写し、唱歌の引きや旋律の区切りを朱で示す。ただし、引きは全体を通じてあまり細かくは示していない。ところどころ島田による書き込みがあり、〈邯鄲楽之掛〉には空下の際の舞台行道図を墨で簡単に記す。本来二冊のうちの一冊目のみを書写するに留まる。二冊目も書写する予定だったのか、一冊目の内容のあとにかなりの丁数の遊び紙がある。遊び紙の途中に「盤渉序之舞」と「葛之音取」を記すが、「盤渉序之舞」には「現今宗家ノ譜写」と注記があり、鴻山文庫本の「盤渉序之舞」とは唱歌も異なる。挟み紙(柿本氏よりの書状、180×395)一枚あり。

【所収囃子事】舞之部(神之序「真之序之舞」、序之舞、中之舞、天女之舞、破掛り中之舞、破之舞、男舞、神舞、安宅舞、盤渉舞「盤渉早舞」、同休息、同掛ヨリ盤渉吹方/始終黄渉吹方、楽、神楽、羯鼓、大壓面「大慮」、早笛、舞働、下り端)、会釈之部(次第

五通、名乗三通、出羽「出端」、一声、物着三通、彩色、立廻、翔二通、働、短尺之段、呂之吹上、高音、中高音、下高音、草之六下、結六下、小手、替小手、草之繰、呂之小手、上高音三通、祝詞二通、葡萄、草之留、切組之翔、真之来序)、狂言会积之部(次第／一声、舞、楽二通、神楽、舞働、羯鼓、翔、下り端、早笛、舎切、棒之笛、難波間、双調会积、狂言来序)。

A22、茶色表紙『習手付』

袋綴横本(76×164)。外題「習手付」。墨付二十八丁。裏表紙に「正木」と墨書。正木は島田の師の一噌流笛方正木利三郎か。唱歌を墨で、引キなどを朱で記す。また、タイトルのみで実際の唱歌のない項目もある。一部、島田によると思われる鉛筆の書き込みあり。

【所収囃子事】採之段(掛替、呂之手替、呂之手短分)、鈴之段(呂之手替、同替)、真之音取、礼脇、真之一声、中高音跡吹返小手呂、真之呂、真之クリユリ、真之六之下、真之出端、真之留、真之来序、真之名乗、真之神楽、干之音取、結音取、鬘之音取・同草之音取、双調音取、陰之音取、採之段、羯鼓、豊後下り端、一管盤渉楽吹様、同神楽、早笛、掛ヨリ盤渉楽、邯鄲樂掛ヨリ盤渉(二段替・三段替二種・三段開替・同替)、盤渉楽、乱獅子、盤渉序之舞(初段・二段目・三段目・地)、久之舞「急之舞」、曲水、安宅、ヲロシ、金春笏之舞、双調之会积(呂(脇囃子指留／高砂志賀之類)、呂(二番目候之指留／東北羽衣等之類)、中之高音、上之高音、上之高音(二段上は時／跡之方え吹方)、小手、高音、留)、会积之部(大臣之次第、男之次第、女次第、山伏之次第、僧之次第、真物着、行物着、草物着、彩色、立廻、翔、出端働、熊野短尺之段、切組之翔、真之来序、葡萄、祝詞翔)、狂言アシライ(楽長短二通、神楽、舞働、羯鼓、翔、下り端、早笛、舎切、棒振、狂言舞、狂言之来序、狂言会积之部)。

A23、『習手付』

折紙仮綴(150×198)。共紙表紙の中央に「習手付」と打付書き。全三丁。朱入り。年記・署名なし。「(老松)紅梅殿(望月)(道成寺)(石橋)頭付」(A14)と同一の筆か。小書部分の唱歌を部分的に記し、囃子の手や型もところどころ記す。最後に一ツ書で「一、白頭事大へし上へ出打コミ／はたらき太コ二段打事也」「一ゆう曲 なおり笏之舞之通／なおりよりすぐに初段下なし／あと常通」とある。

【所収曲】喜多流(融) 曲水之舞、喜多流(熊野) 三段之舞、喜多流(熊野) 膝行三段之舞、金春流(熊野) 膝行三段舞、金春流(融) 笏之舞、喜多流(融) 笏之舞

A24、重習書留

背に金文字で「重習嶋田」とあるハードカバーの手帳(230×150)。墨付五十七丁(全二百四丁)に、大正七年頃から昭和にかけて島田が実際に勤めた舞台の演出を書き留めたもの。曲名や小書名を記したあと、笛の替エの演出を中心にシテやワキの所作、大小太鼓の特殊な手組、謡の詞章と笛の手を吹き出すきっかけ、唱歌、囃子事の寸法、流儀間の異同のほか、簡単な舞台行道図や八割譜なども記す。宝生流(葵上) 梓之出や(安宅) 延年之舞など、江戸時代の演出を詳細に記す場合がある。このうち(安宅) 延年之舞の記録は、大震災時の被災記録などもあり。見返しにも記述あり。鉛筆書きとペン書きが混在する。観世流(杜若) 恋之舞(シテ梅若万三郎)の唱歌と、(忠霊)の頭付の挟み紙二枚あり。

【所収曲】観世流(融) 十三段之舞、(養老) 水波之伝、(羽衣) 彩色、(千手) 郢曲之舞、観世流(百万) 法楽之舞、観世流(乱) 頭之舞、宝生流(小鍛冶) 白頭、観世流(富士太鼓) 現之楽、観世流(葛城) 大和舞、観世流(熊野) 村雨留・読継之伝、宝生流

〔乱〕膝行、〔葛城〕大和舞、観世流〔天鼓〕弄鼓楽、観世流〔融〕酌之舞、〔融〕遊曲、〔松風〕戯之舞、観世流〔邯鄲〕夢中酔舞、宝生流〔杜若〕沢辺之舞、〔砧〕、〔砧〕〔一声〕の時・〔梓〕の時、喜多流〔絵馬〕女体、観世流〔融〕酌之舞、宝生流〔杜若〕沢辺之舞、観世流〔敦盛〕二段之舞、金剛流〔船弁慶〕白波之伝、観世流〔安宅〕滝流、喜多流〔富士太鼓〕狂乱之楽、喜多流〔竹生島〕女体、喜多流〔熊坂〕働キ入、喜多流〔松風〕見留、観世流〔蟬丸〕替之形、観世流〔松風〕戯之舞、観世流〔七騎落〕恐之舞、金春流笏之舞、観世流〔巻絹〕替之装束、〔八島〕弓流、〔八島〕素働、宝生流〔葵上〕梓之出、宝生流〔葵上〕梓之出〔江戸時代〕、観世流〔安宅〕酌掛り、宝生流〔春日竜神〕白頭別習・竜神揃、宝生流〔安宅〕延年之舞〔平政香初演時・安永九年時・天明四年時・大正十五年時の記録〕、宝生流〔松風〕真之留、喜多流〔安宅〕延年之舞、観世流〔七騎落〕〔盛久〕〔小督〕等恐之舞、観世流〔石橋〕大獅子、観世流〔巻絹〕神楽留、観世流〔鞍馬天狗〕素カケリ、喜多流〔竹生島〕女体、喜多流〔山姥〕舞入、観世流〔安達原〕〔黒塚〕黒頭、宝生流〔乱〕和合、喜多流〔湯谷〕〔熊野〕三段之舞、観世流〔砧〕梓之出、観世流〔高砂〕八段之舞、観世流〔仲光〕〔満仲〕愁傷之舞、観世流〔春日竜神〕竜女之舞、宝生流〔乱〕膝行、観世流〔仲光〕〔満仲〕愁傷之舞。

A2.5、青色布表紙 習事扣帳

小型のメモ帳型の八割箋(84×122)。外題「八拍子掛 島田」と朱で記す。墨付四十九丁。喜多流〔富士太鼓〕狂乱之楽の挟み紙一枚(両面に記載)。ほとんどが鉛筆書き。曲名を記した後に、シテやワキの所作、大小太鼓の特殊な手組、笛の手を吹き出すきっかけ、笛の唱歌、囃子事の寸法などを記述する。ところどころ出勤日や共演者名の記載もある。で、大正期から昭和期にかけて島田が舞台を勤める際に備忘として書き留めた手付と考えられる。本書末尾に「座右の銘」と題して「憎むとも憎み返すな如時迄も憎み憎まれ果てしなれば」面白き事もなき世を面白く住みなすものは心なりけり」「天下の大將ハ御口無調法も一ツの芸」「他人に輿行を見積られぬが何よりの徳」と記す。

【所収曲】喜多流延年舞、金春流笏之舞掛り(昭和三年五月)、宝生流〔石橋〕中入、金春流五段〔神舞〕、宝生流〔杜若〕沢辺之舞(昭和四年四月)、〔芭蕉〕一調一管、宝生流〔満仲〕、喜多流〔竹生島〕女体、宝生流〔井筒〕物着、〔葵上〕梓出・空折、観世流〔百万〕法楽舞、喜多流〔海人〕経懷中、〔遊行柳〕青柳之舞、観世流〔白髭〕三段楽、〔杜若〕恋之舞、観世流〔巻絹〕神楽留、観世流〔融〕舞返・袖之留、宝生流〔自然居士〕、宝生流〔半菰〕立花、観世流〔杜若〕素囃子、金春流大和舞、観世流〔百万〕法楽之舞、宝生〔熊野〕三段舞、〔杜若〕恋之舞、宝生流〔井筒〕物着、森田流〔杜若〕恋之舞、〔八島〕弓流・素働、宝生流〔海人〕二段返シ・懷中之舞、沢辺之舞、宝生流〔熊野〕膝行・三段之舞、宝生流〔唐船〕棹之掛り、宝生流〔熊野〕三段之舞、観世流〔安達原〕〔黒塚〕黒頭、観世流〔松風〕戯之舞(昭和十一年十一月)、観世流〔船弁慶〕重前後之替(昭和十一年十二月)、観世流〔弱法師〕盲目之舞(昭和十二年四月)、観世流〔采女〕美奈保伝(昭和十二年五月)、観世流〔海人〕赤頭三段之舞、観世流〔安達原〕〔黒塚〕黒頭、観世流〔井筒〕物着(昭和十四年六月)、〔弓八幡〕初卯之舞、〔木賊〕ヒットリ、〔柏崎〕思出之舞(昭和十五年六月)、喜多流〔葛城〕神楽、〔夕顔〕山端之出・法味之伝(昭和十七年九月)、〔千手〕郢曲之舞、〔鶴飼〕真如之月、宝生流〔鶴〕赤頭、〔海人〕黒頭・懷中三段之舞、〔安宅〕酌掛(大正十四年十一月)、〔養老〕水波之伝、観世流〔野宮〕合掌留、〔松風〕見留(昭和二十七年十一月)、観世流〔羽衣〕和合、〔船弁慶〕前後替、宝生流〔鷺〕翁無之式(昭和二十五年正月)、観世流〔葛城〕大和舞(大正十年四月)、観世流〔天鼓〕弄鼓楽(昭和十年五月)、〔卒都婆小町〕一度之次第、梅若〔融〕笏之舞、〔鷺〕、喜多流〔鷺〕五段乱留、観世流〔巻絹〕神楽留、〔巻絹〕二段神楽、宝生流〔乱〕膝行、〔木賊〕。

A2.6、天保十二年〈融〉酌之舞 唱歌・型付

一枚紙（182×664）。外題・内題なし。天保十二年正月十六日に観世大夫宅で舞った〈融〉酌之舞の唱歌と型付、行道図。最後に能番組（左近、熊八郎、五郎次郎、三太郎、惣次郎）を墨書。年記なし。島田筆か。

A2.7、安永年間〈安宅〉延年 唱歌・型付

大正十五年六月能楽協会東京支部の番組（312×462）三枚の裏に、ペン書きで「安永四年正月十八日御本丸中奥御能宝生流〈安宅〉勸進帳独吟・延年之舞、宝生太夫、宝生万作、一噌又六郎政香三十一才花押、大倉六蔵、金春五郎兵衛」、「安永九年五月四日〈安宅〉延年之舞、宝生弥五郎、宝生新之丞、又六郎、大倉六蔵、金春五郎兵衛」、「天明四年十月二日御本丸中奥御能〈安宅〉延年之舞、喜多十太夫、森田長七郎、幸虎市、金春五郎兵衛」、「安永八年十一月二十三日御本丸中奥御能〈安宅〉延年之舞、金春太夫、宝生新之丞、貞光小八郎、大倉六蔵、葛野九郎次郎」の番組を記し、それぞれ「延年之舞」の笛唱歌と型を記す。外題・内題なし。年記なし。島田筆か。

A2.8、天保五年宝生流〈葛城〉大和舞 型付・唱歌付

コクヨ便箋（228×178）三枚に天保五年十一月十一日の能番組（弥五郎、又六郎、清次郎、九郎兵衛、惣右衛門）、その時の装束、型付、「大和舞」の笛唱歌と太鼓の手をペンで記す。外題・内題なし。年記なし。島田筆か。

A2.9、安永年間〈融〉笏之舞 型付・唱歌付

半紙（176×40）。内題なし。年記なし。安永元年十二月二十一日「御本丸奥能」（金春八左衛門、進藤久右衛門、一噌又六郎政香（花押）、大倉六蔵、高安三太郎、金春惣右衛門）、安永六年二月二十一日「尾州様江撰津守様より養子成立祝儀能」（金春太夫、彦太郎、又六郎政香、六蔵、五郎兵衛、惣右衛門）の記録。それぞれ配役を記した後、カカリの型や笛唱歌や太鼓の打ち方について墨書。ところどころ朱筆あり。島田筆か。

A2.10、天保・明治朝長〈儀法〉儀法音取・唱歌

便箋（180×200）五枚に、明治十二年十月二十六日「根岸前田様御能」における〈朝長儀法〉（前田利泰様、新朔、要三郎、清水半次郎、南部様、里田長知様）と、天保四年四月二十一日「金春太夫方ノ扣」のそれぞれの唱歌をペン書き。謡や太鼓の手についても言及あり。里田長知は黒田長知の誤記か。一部赤鉛筆も混じる。内題なし。年記なし。島田筆。うち二・三丁と四・五丁は糊付けされ一枚紙となっている。

A2.11、明治期〈清経〉音取 唱歌・指付

松屋用箋（242×332）二枚。一枚に「一子相伝極秘」として〈清経〉音取の唱歌を記し、ところどころに足取りを付記。別の一枚に「音取」の部分的な指付を記す。「極秘」一子相伝 清経音取 島田」と書かれた熨斗袋に「〈明治期〈清経〉音取・〈船弁慶〉前後・〔序之舞〕唱歌」（A2.12）とともに収められていた。年記なし。

A2.12、明治期〈清経〉音取・〈船弁慶〉前後・〔序之舞〕唱歌

薄様四枚。「恋之音取」の唱歌（280×330）。「明治三十一年五月二十九日梅若舞台ニテ勤／一噌要三郎書」と朱書あり」と、〈船弁慶〉前後の「序之舞」初段（280×290）。「明治九年四月九日梅若御宅ニテ相勤」ならびに「盤渉序之舞」の唱歌（「明治十一年九月二十六日招魂社ニテ三日目」）を墨書したものを糊付けし、綴じ合わせた。「極秘」一子相伝 清経音取 島田」と書かれた熨斗袋に「〈清経〉音取 唱歌・指付」（A2.11）とと

もに収められていた。

A2.13、明治三十四年〔富士太鼓〕狂乱之楽〔唱歌〕

便箋(238×153)二枚に、明治三十四年十月十二日の能番組(喜多六平太、一噌、三須錦吾、高安亀叟)と「盤渉楽」の三段目以降の唱歌をペンで記す。内題なし。年記なし。島田筆か。

A2.14、大正四年〔鸚鵡小町〕頭付・唱歌

「鸚鵡小町頭付」と墨書した封筒の中に、手漉き和紙の便箋(270×193)三枚とコクヨ便箋(252×182)一枚。手漉き和紙には「鸚鵡小町宝生流」と題して詞章を墨で一つ書きした下に、手の名称を朱で記し、三枚目に舞の唱歌と最後のアシライについて記す。唱歌には朱で引キを示す。コクヨ便箋には「大正四年一月十四日三須調習会での番組 指ヨリ(長、初而又六郎四十四才、松平頼和、利吉)」と記した後に舞の唱歌と型を記す。コクヨ便箋は島田の筆。

A2.15、明治以降老女物〔序之舞〕唱歌

折紙(198×189)二枚継ぎ。明治四十五年三月二十四日梅若舞台での「観世紅雪一周忌追善能」の〔檜垣〕(万三郎、信安、又六郎、平司、鬼三)について前シテ登場のメモ及び「序之舞」の唱歌、大正三年十月四日梅若舞台での〔姥捨〕(万三郎、信、又六郎、喜太郎、繁次郎、仙太郎)のワキ登場と「序之舞」唱歌、昭和十一年十月十日「川井彦兵衛追善」の〔姨捨〕(万三郎、新、又六郎、悟朗、利吉、惣右衛門)の「序之舞」三段オロシの唱歌を墨書する。いずれもシテは万三郎。年記・署名なし。
〔所収曲〕檜垣、姥捨

A2.16、昭和二十一年「本開口」唱歌

八拍子箋(158×228)の裏に「昭和式拾一年十月於京都金剛舞台」として本開口の唱歌を墨書。唱歌には引キが細かく示されている。

A2.17、明治二十一年「脇開口」唱歌

昭和二十一年九月二十六日多摩川能楽堂での花友会番組(145×223)の裏に「ワキ真ノ音取アト開口吹方」としてワキの型を付記しながら唱歌を鉛筆書き。島田筆。

A2.18、〔仲光〕愁傷之舞〔葵上〕梓之出・空ノ祈 唱歌

紙片三種(127×90)の表裏に〔仲光〕愁傷之舞(昭和十六年十一月、シテ万三郎)の舞の寸法と笛の唱歌、〔葵上〕梓出・空ノ祈りのアシライ、別重習・重習の演目や免状料などを鉛筆書き。島田筆。

A2.19、〔七騎落〕恐之舞 金春流融〔笏之舞〕替装束〔松風〕メモ

大正十三年十一月秋季別会の番組(153×295)の裏に、〔七騎落〕恐之舞、〔融〕笏之舞、〔巻絹〕替装束の〔イロエ〕の寸法や唱歌などペン書き、〔松風〕シテ登場から舞前までの簡単な頭付を鉛筆で記す。島田筆。

A2.20、〔真之序之舞〕唱歌

八割箋(130×382)二枚に鉛筆で「真之序之舞」の序より二段までの唱歌を記す。内題「真ノ序」。冒頭の欄外に真と草の別、序の数、赤鉛筆で序の太鼓の手なども記す。島田筆。

A2 21、一噌流習事唱歌書付紙片

習い事の唱歌の断片を記した紙片十種。①「取之序」と「休息」。便箋一枚(223×190)にペン書き。②喜多流(井筒)段之序(大正三年九月十九日、六平太、新、又六郎、平司、利吉)。便箋一枚(216×184)にペン書き。③(砧)梓之出。便箋一枚(246×176)に墨書し、鉛筆書きで「家元の付ナリ」と付記。④「平調返」。和紙一枚(175×246)に墨書し、鉛筆書きで「家元の付ナリ」と付記。⑤宝生流(乱)膝行の初段と五段の唱歌(大正十年五月十四日、宝英、新、又六郎、悟朗、利吉、林太郎。文政七年九月五日、弥五郎、新之丞、又六郎、清次郎、九郎兵衛、惣右衛門)を便箋一枚(238×163)にペン書き。⑥(木賊)クリより舞後まで(昭和十年四月三日、鏝之丞、新、又六郎、悟郎、利吉)。便箋一枚(190×222)にペン書きし、最後に「是ハ当日後見して帰宅後認メ置キ候モノニテ其の俣書写シ御送り申モノニ有之候 鏝之」とする。⑦(木賊)(序、休息)。便箋(213×189)にペン書き。⑧「序之舞」替の唱歌。和紙(243×331)に墨書。⑨金春流(熊野)三段之舞ノオロシ。鉛筆書きのメモ(73×106)あり。⑩観世流(敦盛)二段之舞の寸法。和紙(244×164)にペン書き。

A2 22、(舟弁慶)重前後(盤涉序ノ舞)初段ヲロシ手付断片

署名・年記なし。日記メモ用紙(115×82)に「又六郎ノ舟弁慶重前後(盤涉序初段ヲロシ楽譜)を鉛筆書きする。大槻十三・渋谷政寛より島田巳久馬宛封筒を半分切った中に、「小鼓・太鼓手組断片」(C9)、小鼓稽古等級一覧と共に収める。

A3 新作・復曲関連

A3 i、昭和二十六年(求塚)試演関係書類一式

昭和二十六年十二月二十三日に観世華雪が復曲上演した(求塚)試演会に際する観世元正よりの出演依頼状(196×1032、封筒あり)と巳久馬からの返事に対する礼状(215×153、便箋のみ)、仮製本した(求塚)の謡本(238×162)二冊。十月二十六日付、観世元正より島田に宛てた封筒に一括して収める。謡本には朱で笛の手の名称を付す。謡本の表紙に島田による「華雪直筆のよしなり」と鉛筆書きのメモあり。依頼状は十月十九日の日付で、以下の通り。

【翻字】来る十二月二十三日東京に於きまして(観世流在京全員を以て観世華雪に)よる「求塚」の試演会を開くことになり(ました)之は当流に此の曲のないのを(物足らなく思ひ復活をさせたいと考え)乍ら実現せず(に)早世致しました父の(遺志を果すことにもなりません)が同時に(先代逝去後幼少な私の芸道の師範役)となつてその(薫陶に当り)或は流儀内(外の六ヶ敷い問題の処理)などを戦時中から(戦後にかけて)諸艱難の中に(当つてくれ)ました華雪の(苦勞ハ想像に余りある)のであります(この父であり師である華雪)が私の(成年と共に)一応後見人の(地位から)離れましたので(この長い間の苦勞に感謝)の意味を以て(最も芸術家に相応しい)と思はれます(方法で永久に能楽史上に)記念致す(ために)今回(求塚の開曲の任に)当つて(貰ふ事に)成りました(現在この曲の)ございます(宝生、喜多、金剛の各家元)に(御了解を)頂きまして(復活し華雪がシテ)を(勤め全流員を以て)この試演会を開く(ことに)致しました(わけ)でございます(つきましては)第一回の試演に(当り)川崎九淵、(幸祥光、観世元信、島田巳久馬)の諸師に(囃子をお願ひ)したく(存じ)ました(近く正式に御願ひ)する(筈)でございます(が)不取敢(この本をお送り)致します(ので)何卒(よろしく)御手附の程(御願ひ)申上げ(ます)を(し)せ(ま)つて(居り)まで(ママ)甚だ(恐縮)でございます(が)十一月のはじめに(囃子の手)をつけ(て)いたゞいて(申合せ)の会を(したい)と思ひ(ます)ので(十月の末)までに(御届け)頂け(ましたら)幸でございます(同封の葉書)を以て(御返事)下さい(ます)よう(御願ひ)申上げ(ます)十月十九日 観世元正(島田巳久馬殿)

A3-2、昭和二十七年〈綾鼓〉番組・頭付一式

昭和二十七年十二月七日(日)の立太子奉祝〈綾鼓〉復曲記念番組(188×535)、仮製本された〈綾鼓〉の謡本(表紙・裏表紙なし。228×158。前付二丁、本文八丁)を茶封筒に収める。封筒表には島田已久馬の宛名と「綾鼓謡本在中」、裏には、十一月十七日の日付と差出人喜多実の名を墨書(差出人住所は目黒能楽堂のゴム印)する。封筒裏には「当日、北村、安福、柿本相手/昭和二十七年十二月七日喜多実相手新作綾鼓/相勤ム」と鉛筆で書き入れ。番組裏に、「綾鼓」のシテ登場段以降の頭付を記す。「中高音強く」「強く小手」等の吹き方の指示や、「日吉出羽一段」「立廻り」等の囃子事に関する書き込みもあり。謡本には鉛筆(一箇所赤鉛筆)で頭付を書き込む。「強く中高音又ハ上高音」「中入シテのハコビにより送り吹クも」等の注記あり。書き込みは島田であろう。墨で「次回申合せ/十一月廿一日(金)/午後二時より」と記載された紙片(120×82)の挟み込みあり。

A4 狂言アシライ

A4-1、狂言笛会釈頭付

袋綴横本(120×174)一冊。全十五丁。共紙表紙の中央に「笛会釈」と打付書き。第一丁表上に角印、最終丁の裏に「大正三乙卯年四月吉辰/認之三熊氏江贈 鷲仁右衛門/七十四翁畔翁(角印)」とあり、鷲畔翁から島田へ贈った狂言の笛頭付。詞章を抜き書きし、そこで吹く囃子事の名称を記す。目録はなし。明治四十四年、観世喜之(初世)が謡本発行のことで観世宗家から破門された時、鷲畔翁は服部彦七などと共に喜之の観世九阜会に参加した。大正四年、喜之と宗家の和解になると能の世界から離れたが、島田が九阜会と一緒に演能活動をしていた時期に贈られた伝書である。水野文庫蔵の「囃子附」とは掲載曲の順が少し異なる。

【所収曲】末広かり「末広」、三本柱、麻生、目近込骨「目近」、張蛸、蛭子大黒、蛭子毘沙門、大黒連歌、連歌毘沙門「毘沙門連歌」、氏結、相合烏帽子、昆布柿、雁厂金、松樫、三人夫、餅酒、勝栗、鍋八撥、早漆「塗附」、煎物、二人袴、引敷智、懐中智、瓜盗人、腰折、蟹山伏、苞山伏、柿山伏、禰宜山伏、犬山伏、栄螺、蛸、祐禅「祐善」、名取川、金地蔵「金津」、地藏舞、大般若、塗師、神鳴、宗論、髭櫓、業平餅、石神、若市、若菜、鬼ノ槌、宝ノ瘤取、老武者、菊水祖父、歌仙、節分、鬪罪人、餌差十王、唐角力「唐相撲」、法師ケ母、朝比奈、八尾、庵の梅、半銭、通円、楽阿弥、枕物狂、鉢叩、御田、間の部末社、和布刈、絵馬、東方朔。

A5 他流儀手付

A5-1、文政四年筆茶色布張り表紙森田流頭付

袋綴横本(96×206)。外題・内題なし。二百二丁。一丁表に水平保三の角印あり。第二丁より目録五丁。目録には二百八十五曲あり、廃曲を多く含むが、実際の記載の順は目録と異なる。流儀は森田流。二百八十五曲のあとに翁と狂言会釈六十曲の頭付を付し、そのあとに〈白楽天〉以下八曲の留について記す。そして「文政四辛巳年七月高橋藤三郎/藤原正則所持/十七歳」と記してから、「僧之次第」などのアシライの唱歌を記す。

【所収曲】高砂、弓八幡、御裳濯、志賀、松尾、吉野、伏見、淡路、養老、鼓滝、絵馬、鶴羽、右近、呉服、佐保山、西王母、老松、白楽天、放生川、源太夫、難波、月宮殿「鶴亀」、鶴祭、東方朔、白髭、橘、大社、寢覚、江嶋「江野島」、嵐山、加茂「賀茂」、玉津嶋竜神、竹生島、和布刈、亀浦島、九瀬渡「九世戸」、玉井、皇帝、岩船、氷室、金札、田村、八島、箴、忠度、経政、道盛「通盛」、俊成忠度、碇潜、巴、清経、兼平、実盛、頼政、朝長、知章、清重、志賀忠度、敦盛、生田敦盛、東北、芭蕉、江口、楊貴妃、野宮、井筒、采女、仏原、夕顔、半菰、定家、檜垣、鸚鵡小町、二人祇王、住吉詣、加茂物狂、

身延、班女、碁、千寿「千手」、木賊、関寺小町、二人静、吉野静、雲雀山、正尊、高野物狂、落葉、羽衣、胡蝶、陀羅尼落葉「落葉」、杜若、小塩、六浦、藤、誓願寺、朝顔、雲林院、葛城、姨棄「姨捨」、遊行柳、西行桜、雨月、熊野、松風、草紙洗、舞車、鞠物狂、船弁慶、紅葉狩、梅枝、天鼓、七面「現在七面」、富士太鼓、邯鄲、唐船、枕慈童、三笑、道明寺、一角仙人、松山天狗、上宮太子、輪藏、三輪、竜田、巻絹、室君、貴船、放下僧、花月、自然居士、東岸居士、藤栄「藤永」、盛久、芦刈、春栄、安宅、七騎落、小袖曾我、元服曾我、横山、鈴木、陰山、満仲、松虫、小督、錦木、巖島、海人、融、当麻、須磨源氏、絃上、石橋、望月、道成寺、鷺、国栖「大般若」、源氏供養、花筐、籠祇王、弱法師、桜川、籠太鼓、柏崎、百万、三井寺、隅田川、蟬丸、丹後物狂、稻荷、善知鳥、女郎花、通小町、卒都婆小町、浮舟、玉葛、三山、船橋、歌占、烏帽子折、橋弁慶、蟻通、山姥、阿漕、葵上、黒塚、飛雲、葛城天狗、鶏竜田、熊坂、車僧、鐘引、鞍馬天狗、是界、張良、降魔、愛宕空也、鶉飼、鍾馗、檀風、谷行、生贄、鉢木、夜討曾我、護法、竜虎、春日竜神、大会、大蛇、松山鏡、照君「昭君」、小鍛冶、舍利、土蜘蛛、野守、大江山、項羽、羅生門、呂后、常陸帶、文覚、雷電、鶴、藍染川、鉄輪、愛寿、大仏供養、錦戸、行家、咸陽宮、土車、鳥追「鳥追舟」、殺生石、現在鶴、調伏曾我、禪師曾我、藤渡「藤戸」、正儀世守、俊寛、水無瀬、撰待、景清、小原御幸、砧、竹雪、太刀堀、七人猩々、猩々、恋重荷、逆鉾、綾鼓、千引、薄、草薙、関原与市、豊干、岡崎、鱗形、躑躅、飛鳥川、木曾願書、犀川、泰山府君、春近、合浦、求塚、楚佐、武王、空蟬、浜川、浦下部、植田、反魂香、濡衣、横笛、鶴岡、帰雁、花筐、獅子、琢漉、忠信、菊慈童「枕慈童」、小蝶源氏、翁、三番叟、狂言会釈（曲名省略）。

A6 笛伝書

A6-1、中村七郎左衛門伝書

卷子本（紙高269）。「天文時代笛秘伝書」と鉛筆書きした紙（用紙裏には「免状 脇能 彦通」とあるので本来は免状包み紙か）に包まれる。年記・署名なし。「天文二年中村七郎左衛門長親奥書笛伝書」の転写本で、巻末に「天文二年八月十三日 新村縫助宛中村七郎左衛門長親」「天文五年卯月十六日小川弥次郎宛新村縫助豊資」「天文七年二月吉辰付中村七郎左衛門」の三種の奥書を記す。筆写者不明だが、料紙も新しく、昭和期の写しと思われる。虫喰いや欠落部分（本文首部、末尾、十二調子輪図の三箇所）の欠落がとくに著しい）を朱で忠実に再現している。同じく転写本の故藤田大五郎蔵（故武内金平旧蔵）と奥書は一致するものの欠落具合が異なり、故藤田所蔵本とは別系統の写本と思われる。ところどころ鉛筆で「○」や「◎」の記号が付されており、持ち主が記事内容を丁寧に読み込んでいたことが窺える。

【参考文献】山中玲子「天文二年中村七郎左衛門長親奥書笛伝書」翻刻と解題」（『能研究と評論』月曜会雑誌13、一九八五年）。

B 小鼓手付

B1、幸清流小鼓手付

横本（129×130）。千鳥模様空押縹色表紙。桐箱入り（233×293×240）。『大成改版 旅の友』（訂正者観世元滋、発行兼印刷者桧常之助、東京店桧大瓜堂、印刷所桧印刷所青木常次郎、大正十四年刊）に朱で幸清流の手を書き込む。『旅の友』は内組一・二を巻一として一冊にまとめた十番綴で全二十二冊。内組が巻十一まで（巻八が重複）で二百二十曲所収。外組は巻十二から十七まで。巻十六までは十曲、巻十七は十二曲を収める。巻十八は番外で九曲、巻十九と巻二十は別習で十曲、巻二十一も別習で八曲を所収。巻二十二は乱曲集。内組、外組、番外、別習には笛の手も書き込まれている。乱曲集には小鼓・笛とも書き込みなし。書き込みの筆者は不明。

B2、〈大蛇〉小鼓手付

喜多流謡本（大正十二年十一月、喜多六平太、わんや書店刊、228×160。前付二丁。本文八丁）の詞章の横に幸清流の手を朱で記す。題簽に朱で「島田有」。

B3、幸清流小鼓 粒付

半紙七枚（273×394）。年記・署名なし。三地・四ノテ・ノムテなど基本の手から、長地など舞の手、クリ頭・中入トメ、お調べに到るまで具体的な粒付を墨で列挙し、目安となる大鼓の粒を朱で記す。

B4、鼓術間附并舞手配秘書

袋綴（248×168）共紙表紙の中央に「幸流／鼓術間附并手配秘書」と打付書きがあるが、幸清流の手付。流の墨付三十一丁。年記・署名なし。前半は三ツ地、四ノ手などの基本的な手の粒付で、後半は目録のあとに、主として居囃子の際の囃子事の手配りを一部具体的に粒で記す。粒を示す「▲」「○」「●」はスタンプレで押したものか。

【所収囃子曲】序之舞、中之舞、男舞、神舞、早舞、天女之舞、太鼓中ノ舞、破掛リ羯鼓、出端越、出端不越、一声本越、一声半越、一声片越、一声不越、出端不越（再出）、下リ端、大癒、早笛、舞働、舞働（太鼓佐吉流）、ハタラクキ（太鼓入り立回り）、カケリ、イロエ、一声鬢越、一声頭越（葛野合方）、一声頭越（金春流・高安流合方）、太鼓入破之舞、大小破之舞、大小楽（森田流ノ配リ・一噌流ノ配リ）、神楽（居囃子地直リ・段直リ・弊捨）、邯鄲之楽、富士太鼓之楽のカカリ、脇能楽（佐吉流）、次第、来序、真ノ来序、梓、ノツト、祈り、イノリ働（出端働）、（国栖）下リ端之舞、観世流呂上ゲ序之舞四段、真之序之舞、早鼓、早舞流シ之事。

B5、『幸清流 唱歌拍子割』

拍子箋仮綴横本（130×192）。墨付三十七丁。挿入一枚（〈羽衣〉序之舞）。共紙表紙に「島田素水／幸清流／唱歌拍子割」と打付書き。島田筆と認められる。年記なし。墨で笛唱歌を、その上に鼓の手組名を記し、ところどころ朱で鼓の粒を書き込む。「獅子」の曲名の下に「島田流」「幸清流」とあるが、唱歌の内容は一噌流。シテの流儀別の手配りや寸法について朱や鉛筆による書き込みも一部あり。早笛・舞働・神楽・総神楽・揉之段・鈴之段・鷺乱等、唱歌のみで鼓の手の記載のない囃子事も多い。複数の曲名の下に「島田」の印あり。裏表紙に幸清流シラベの譜のメモあり。

【所収囃子事】破掛リ中之舞、五段中之舞三段目、天女之舞、（東北）序之舞、神舞（初段同下・二段目同下・三段目同下・早舞掛リ（五段早舞三段目同下）、早舞、舞働、楽之譜、宝生流猩々乱、早舞同初段（同二段目同下）、立拝掛リ男舞（初段同下・同二段同下・同三段同下）、（安宅）男舞同掛（同初段同下・同二段同下）、下リ端、大癒、破掛リ羯鼓（地直リ・段直リ）、神楽、総神楽、獅子、盤渉楽、揉之段、鈴之段、真之序之舞（初段・二段・三段）、鷺乱、宝生流（安宅）延年之舞（初段・二段・三段）。

B6、灰緑色布張り表紙『幸清流随習録』

八割箋（126×195）を袋綴し、表紙をつける。墨付八十九丁。遊び紙多し。表紙裏に「青木」、第一丁表に「槌田峯夫」の印あり。第五丁に内題「幸清流／随習録」、「青木金太郎」の署名あり。年記なし。目録の二丁後に目録三丁。基本的な囃子事について手組名で手配りを記すが、曲によっては具体的な粒も記す。笛・大鼓・太鼓の流儀の違いによって生じる粒付の異同について記す曲もある。「青木蔵書」「槌田峯夫」の角印や丸印が随所に押されている。槌田峯夫は幸清次郎の素人弟子で、千田峯夫の名でも活動していた

人物か。

【所収囃子事】中之舞、序之舞、男舞、早笛、舞働、神舞、出端（本越・不越）、早舞、クツロキ、楽、神楽（段直リ・地直リ）、次第、一声（本越・半越・片越・不越・鬘越・頭越・狂女越）、破之舞、来序、真之来序、下り端、羯鼓、大癒、カケリ、〔善知鳥〕カケリ、〔船弁慶〕波頭、〔熊野〕車返シ、真之脇能・五段次第・真ノ一声、〔白鬚〕出端、〔松風〕イロエ掛リ（イロエ掛リ中之舞、同破之舞）、〔船弁慶前後替・早笛〕、〔船弁慶〕重キ前後替・舞働・盤渉序之舞、盤渉序之舞、盤渉楽、神楽、アツサ、ノツト、イノリ、出端（老松・白楽天）、真之序之舞（老松・白楽天）、和合・彩色之事、彩色伝、五節之舞（國栖）、〔鉢木〕一声・一声ヨリ早笛、乱（猩々）。粒を記した挟み紙あり（曲目不明）。

B7、深緑色表紙「随習録別巻」翁・三番叟」手付

袋綴横本（151×227）。青色表紙。題簽「翁式三番叟」、表紙右横に「幸清流／青木金太郎」と打付書き。内題「随習録別巻 幸清流翁式三番叟」。ところどころに目安となる詞章を挟み、頭取の手配りを朱で、脇鼓の手配りを墨で記す。裏表紙に「槌田峯夫」とある。最終丁には「大正七年十月謹写／大正十四年一月随習／録原本ヨリ転写／幸清流／青木金太郎」と記し「槌田峯夫」の角印あり。表紙題箋には「青木蔵書」の角印あり。

B8、墨流し表紙「幸清流」翁・一調等手付集

千田峰夫私用の拍子箋（175×238）を袋綴して表紙を付ける。外題「幸清流／小鼓集全」。墨付二十六丁。挟み紙（拍子箋、198×598）一枚あり。年記・署名なし。墨朱両用（一部、鉛筆書き）で謡や粒付、小鼓の手の名称、笛の唱歌などを記す。〔翁〕は頭取脇鼓の手を併記。〔翁〕、〔笠之段〕、〔船弁慶〕のそれぞれのあとに遊び紙多し。〔籠太鼓〕以下は一調の手付。

【所収曲】〔高砂〕真之一声、神楽、梓、ノツト、イノリ、一声（狂女越・小筋違）、翁、〔籠太鼓〕クルイ、〔蟬丸〕道行、〔三井寺〕クセ、〔花筐〕クルイ、〔芦刈〕笠之段、〔船弁慶〕前後之替・重前後替。楽のあとの謡出小鼓。挟み紙に獅子（金春流太鼓、佐吉流太鼓）。

B9、小鼓習事目録并一部手付

折紙綴（157×165）、墨付五丁、小鼓の習い事目録と小鼓手付の合綴。錯簡あり。年記・署名なし。目録には頭取以下、六十七項目を記すが、内容の記載はない。手付は朱墨両用で手組名や粒を記す。一部に島田による鉛筆書きがある。喜多流〔融〕遊曲と〔融〕笏之舞は別人の筆か。

【所収曲】脇能置鼓、真之次第、真ノ一声、喜多流〔融〕遊曲・笏之舞

B10、〔脇能置鼓〕・礼脇・半開口 手付

折り紙（178×446）、目安となる笛の唱歌や手の名称を記しながら、脇能置鼓、礼脇の時、半開口の粒を記す。年記・署名なし。署名はないが島田筆と認められる。

B11、幸清流〔盤渉楽〕手付

拍子箋仮綴（140×200）。墨付五丁。年記なし。墨で一噌流唱歌を、朱で幸清流小鼓の手の名称と粒付を記す。署名はないが島田筆と認められる。

B12、幸清流「勸進帳」手付

八割箋仮綴（140×200）、墨付二丁。年記なし。八割箋に割り付けた詞章を墨で記し、

詞章の右横に小鼓の粒、詞章の上に小鼓の手の名称を朱で記す。署名はないが島田筆と認められる。

B 13、幸清流〔羯鼓〕手付

拍子箋（282×400）一枚に「羯鼓手配」と題し、幸清流小鼓の手配りを粒付で記す。笛の唱歌はなし。年記・署名なし。手書きではなく手組名、粒、カケ声とも判で押したような体裁なので印刷物の可能性もある。

B 14、幸清流〔羽衣〕彩色 手付

便箋（238×162）二枚に、観世流太鼓と金春流太鼓それぞれに対応した小鼓の手配りを鉛筆で記す。年記・署名はないが島田筆と認められる。一部、赤や青鉛筆で島田による加筆あり。金春流太鼓の手配りを記した八割箋に「金春流太鼓〔羽衣〕彩色 手付」（C8）と同収されていた。

B 15、〈敦盛〉〈熊野〉〈千手〉〈花月〉手付断片

手付の断片五点。千田峰夫私用の八割箋に包まれる。年記・署名なし。①番組（190×20）の断片に鉛筆で〈敦盛〉二段之舞の舞の寸法と小鼓の手配りを記す。②八割箋（99×158）にペンで宝生流〈熊野〉三段之舞を記す。③八割箋（131×194）に〈熊野〉車出し・〔短冊之段〕を記す。詞章と大鼓の手は墨、小鼓の手を朱で記す。④メモ用紙（112×66）に〈千手〉郢曲之舞の寸法を鉛筆で記す。⑤八割箋（130×190）に〈花月〉の小歌の一部の詞章を記す。いずれも島田の筆か。

B 16、幸清流一調手付

袋綴（242×166）。共紙表紙に「幸流一調手付」と打付書きがあるが、内容は幸清流。墨付二十六丁。年記・署名なし。一丁に目録と「諸藤」の角印がある。「諸藤」は島田の別姓か。「宝生流〔延年之舞〕平岩唱歌・小鼓手付」（B19）や「〔乱〕・遊曲・笏之舞 大鼓手付」（C2）にも「諸藤巳久馬」の署名や「諸藤」の印がある。詞章の右横に朱で一調の小鼓の粒を記す。島田筆か。

【所収曲】松虫、放下僧、土車、籠太鼓、鳥追舟、笠之段、女郎花、木賊、駒之段、俊成忠度、三井寺、江口、蟬丸、班女、桜川、勸進帳、花筐

B 17、寛政元年・文政十三年筆幸清流一調手付

薄様袋綴（276×198）。表紙ナシ。墨付六十六丁。第一丁より目録が二丁。目録は二種類あり、二つ目の目録の後に「文政八酉年公辺書上ケノ節老松小督入ノ歌占芭蕉班女江口此四番抜ルノ文政十三寅五月右式番書入改ノ時愛」、最終丁裏に「寛政元年ノ酉土六月廿三日出来ノ下村市十郎ノ文政十三年ノ寅五月廿二日出来ノ下村寅五郎ノ時愛（花押）」とある。外題・内題なし。各曲の詞章を記し、朱で小鼓の手組を記す。

【所収曲】雲林院、百万、柏崎、俊成忠度、女郎花、東岸居士、歌占、土車、鳥追舟、籠太鼓、木賊、定家、三井寺、江口、芭蕉、蟬丸、班女、二人静、花筐、同後、桜川、同網之段、笠之段、放下僧、蟻通、松虫、老松、小督、勸進帳、難波、歌占。

B 18、幸流一調一管「序之舞」手付

近藤全宏（幸流小鼓方）より島田巳久馬宛の便箋（223×190）三枚。封筒に「麴町区永田町二一三〇 近藤全宏」差出、「豊島区高田南町一ノ一 島田巳久馬様」宛とある。年は不明ながら、封筒に「廿三日」とあり。封筒表に島田が墨で「一調一管幸五郎流手配」と記している。近藤筆。笛の唱歌の脇に力カリから三段までの小粒の粒を記す。小鼓は幸流と思

われる。ペン書き。

B 19、宝生流〔延年之舞〕平岩唱歌・小鼓手附

一枚紙（二枚継、186×988）。宝生流〈安宅〉延年之舞の小鼓手付。墨書した上から朱で上書きし、そのあとに平岩流の初段の手と三段の手、宝生流以外のシテ方四流の舞い方を記す。年記なし。端書に「扣へ諸藤巳久馬」とある。諸藤は島田の別姓か。「幸清流一調手附」（B 16）や「〔乱〕・遊曲・笏之舞 大鼓手付」（C 2）にも「諸藤巳久馬」の署名や「諸藤」の印あり。

C 大鼓・太鼓手付

C 1、『笛小習集 式』大鼓・笛手付

袋綴横本（72×155）題簽に「笛小習集 式」。墨付三十七丁。冒頭に目次半丁。目次に「島田」の印あり。年記なし。島田筆。前半が大鼓付、後半が笛手付。曲目ごとにシテやワキの所作、笛の唱歌、大小太鼓の特殊な手組や粒付、舞事の寸法、流儀間の異同などを詳述する。内容を朱で補足した箇所や簡単な舞の行道図もみられる。後半の笛手付には「大正二年十一月二日」「大正三 十月」「大正三 十二月」「昭和二年十月」「昭和二年」などと記載があり、島田が実際に勤めた舞台の記録も含まれる。

【所収曲】〈船弁慶〉前後之替、金春流〈安宅〉、〈木賊〉トリ之序、同〈木賊〉又六扣、同〈木賊〉高安扣、〈三輪〉誓納、「乱拍子」、大筋違、〈道成寺〉、金剛流〈鷲〉、金剛流〈望月〉替装束、金剛流〈野之宮（野宮）〉合掌留、宝生流〈葛城〉大和舞、〈乱〉膝行、金剛流〈安宅〉滝流、〈老松〉紅梅殿、観世流〈殺生石〉白頭、観世流〈道成寺〉新九郎方覚、〈安宅〉酌掛り（実相手）、〈八島〉脇留、宝生流〈熊野〉膝行三段之舞、金剛流〈熊野〉三段舞、金剛流〈芭蕉〉水月之伝、金剛流〈唐船〉物着手掛、金春流〈融〉笏之舞、宝生流〈井筒〉物着序之習・イロエ之舞、宝生流〈望月〉、〈八島〉弓流・白働、梅若〈松風〉見留、〈鷲〉、観世流〈葵上〉、観世流〈禅師曾我〉、金剛流〈松風〉見留、宝生流〈春日竜神〉白頭別習、宝生流〈船弁慶〉後之伝・留之伝、金剛流〈清経〉披講、〈葛城〉神楽、〈石橋〉連獅子、〈三輪〉神遊、〈弱法師〉盲目之舞以上大鼓付）、続けて観世流〈羽衣〉和合之舞、梅若〈松虫〉観盃之舞、観世流〈融〉早舞十三段之舞、〈菊慈童〉遊舞之楽、梅若〈安宅〉延年之舞、白頭、遊曲、梅若〈乱〉双之舞、梅若〈松風〉見留、〈朝長〉懺法、修羅置鼓、〈江野島〉二段楽、金剛流〈中之舞〉、金春流〈中之舞〉、観世流〈難波〉天女舞、〈野之宮〔野宮〕〉破之舞、観世流〔老女之舞〕、〈百万〉法楽之舞、〈乱〉双之舞、観世流〔大和舞〕、金剛流〔春日竜神〕前後竜女之舞、喜多流〔小鍛冶〕白頭、観世流白頭、観世流〔安宅〕滝流、観世流〔富士太鼓〕現之楽、梅若〔葛城〕大和舞、観世流〔熊野〕村雨留、宝生流〔乱〕膝行、観世流〔杜若〕恋之舞、観世流〔仲光〔満仲〕〕愁傷之舞、姨捨、金春流〔船弁慶〕遊女之舞、宝生流〔高砂〕作物出、宝生流〔石橋〕休足、〈安達原〔黒塚〕〉働、宝生流〔高砂〕作物出、宝生流〔石橋〕休息、金春流〔猩々乱〔乱〕〕、観世流〔弱法師〕盲目之舞。遊び紙の最後に道成寺のアシライについて鉛筆書きあり。

C 2、『乱』遊曲・笏之舞 大鼓手付

袋綴（242×167）。共紙表紙に「乱 大鼓太鼓付／遊曲 大鼓太鼓付／曲水／笏之舞」と打付書き。ただし曲水の記載はなし。本文十五丁。一丁表に「諸藤」の角印あり。諸藤は島田の別姓か。「幸清流一調手附」（B 16）や「宝生流〔延年之舞〕平岩唱歌・小鼓手附」（B 19）にも「諸藤巳久馬」の署名や「諸藤」の印がある。年記・署名なし。猩々乱は待謡以降の謡を墨で記し、謡の横に大鼓の粒付を朱で記すが、大鼓の流儀は不明。舞事は森田流笛唱歌と大鼓粒付を記し、シテ方の流儀別の舞の段数や一噌流笛のときの大鼓粒付と

クサリ数も記す。呂掛り、中掛り、干掛り、膝行、和合、七人の小書が付いたときの笛唱歌と大鼓粒付も付記するが、このうち膝行はシテ宝生流、笛一噌流、太鼓金春流の記述で和合は幕末の演能(シテ宝生太夫、石之助、笛熊八郎、小鼓観九郎、太鼓左吉)の記述である。〈融〉遊曲と同(破之舞)は太鼓が金春流と佐吉流の両方の場合について舞の行道図を示しながら謡を墨で、大鼓の粒付を朱で記している。〈融〉笏ノ舞(宝生方)と尺ノ舞(金春方)は謡と金春流太鼓の粒を墨で、大鼓の粒を朱で書き記す。

C3、高安流太鼓〔一声 頭越〕 手付

八割箋(115×153)一枚の表裏に高安流太鼓の粒付を赤鉛筆で、小鼓の粒付をペン書きする。江草重忠(東京市牛込区薬王寺町七十一番地)より島田三久馬宛(市外高田町高田三)の封筒(昭和三年四月二十日の日付)に収められる。封筒表に赤・青鉛筆で「頭越高安流入り」と島田の書き入れがある。

C4、萬野流太鼓〔真之一声〕 手付

八割箋(136×221)二枚にペン書きで宝生・観世流の「真之一声」の手配りを粒で記す。笛の唱歌はなし。年記・署名なし。島田筆か。

C5、萬野流太鼓〔井筒〕 段ノ序 手付

半紙(244×330)二枚。このうち一枚には「段ノ序ノ附」と墨で記し、段ノ序の手付を鉛筆で記す。亀井俊雄の住所(新宿区下落合二一六一五)も記されており、亀井よりの情報か。もう一枚には増シ節や間拍子の名を墨で書き留める。どちらも年記なし。

C6、金春流太鼓習事集

袋綴。薄様(140×202)。共紙表紙に「金春流／太鼓習事集」と打付書き。墨付三十丁。冒頭遊び紙一枚のあとに目録が二丁ある。最終丁には「明治元年戊辰十二月下旬／井上忠吉殿より／借用仕り／梅原亥三太郎写之／昭和六年三月蔵／瀧本肇」とある。詞章を抜き出して朱で詳しく太鼓の手配りやシテ・ワキの所作を記す。小書は下掛り中心で、舞の行道図を示す場合もある。〈道成寺〉以下は目録になし。〈石橋〉は舞事の段数や連獅子の小書(明治十三年十月北岡神社舞台勸進能、シテ桜間伴馬、太鼓井上忠吉)の内容も記される。

【所収曲】喜多流〈融〉遊曲・曲水、金春流〈融〉笏之舞・替之配り遊曲之舞、喜多流・金剛流〈海人〉懐中之舞、〈老松〉紅梅殿、〈三輪〉神遊・岩戸之舞、〈熊坂〉イロエ、〈邯鄲〉イロエ、〈杜若〉イロエ、〈野守〉留、〈葛城〉神楽、〈高砂〉祝言之舞・真之掛・真之舞、〈融〉笏之舞、〈道成寺〉、〈望月〉、〈石橋〉

C7、金春流太鼓〔羽衣〕 和合 手付

八割箋(140×200)一枚にペン書きで「序之舞」各段の手配りとキリの一部の手付を記す。年記・署名はないが島田筆と認められる。

C8、金春流太鼓〔羽衣〕 彩色 手付

八割箋(140×200)一枚にペンで「イロエ」の手配りとキリの打様を書き留める。年記・署名はないが島田筆と認められる。観世流と金春流太鼓のときの小鼓の手配りを鉛筆書きした便箋二枚「幸清流〔羽衣〕彩色 手付」(B14)も同封されていた。

C9、小鼓・太鼓手組断片

署名・年記なし。メモ用紙(64×119)三枚に太鼓物で打つ小鼓の手組と太鼓の手配り(養老か)の断片をペンで記す。大槻十三・渋谷政寛より島田巳久馬宛封筒を半分に切つ

たなかに、「(舟弁慶)重前後〔盤渉序ノ舞〕初段ヲロシ手付断片」(A2122)と、小鼓稽古等級一覧とともに収める。

C 10、「親世流太鼓手附諸流異同辨全」

刊本。134×193。親世元規著、檜常之助・堀井呉三郎・江島伊兵衛発行、明治四十三年刊、大正三年再版、大正七年三版。書き込み等なし。

D 免状・相伝状の類

D 1、笛

D 1-1、島田已久馬宛一噌流免状一式

島田に宛てて一噌又六郎から渡された免状十二点。奉書紙二つ折りに墨書で記され、角印を「曲名の上・相伝・又六郎」の三方所に押す。大正四年から昭和三年にかけての免状で、明治四十四年九月、九皋会に出勤したことで一噌流宗家より破門された島田が、大正四年十二月に親世喜之の破門問題が解決したことにあわせて一噌流に再入門の形をとった際の免状であろう。①免状 脇能(360×495の奉書紙二つ折)、②免状 盤渉楽(362×495の奉書二つ折)、③免状 小習一色(362×494の奉書二つ折)、④免状 盤渉序之舞(364×496の奉書二つ折)、⑤免状 翁(363×495の奉書二つ折)、⑥免状 猩々乱(363×494の奉書二つ折)、⑦目録 獅子(362×497の奉書二つ折)、⑧免状 道成寺(363×491の奉書二つ折)、⑨目録 安宅延年舞大正十三年(363×493の奉書二つ折)、⑩目録 安宅延年舞大正十四年(356×484の奉書二つ折)、⑪目録 鷺(391×524の奉書二つ折)、⑫目録 皆伝(361×494の奉書二つ折)

【翻字】①一 脇能/今般入門二付相/許致候事/大正四年十月/一噌又六郎/島田三熊殿、②一 盤渉楽/右相伝致候事/大正四年十一月/一噌又六郎/島田三熊殿、③一 小習一色/右相伝致候事/大正四年十一月/一噌又六郎/島田三熊殿、④一 盤渉序之舞/右相伝致候事/大正四年十一月/一噌又六郎/島田三熊殿、⑤一 翁/右相伝致候事/大正四年十一月/一噌又六郎/島田三熊殿、⑥一 猩々乱/右相伝致候事/大正四年十一月/一噌又六郎/島田三熊殿、⑦一 獅子/右今般伝授相済候事/如仍件/大正六年三月/十一世一噌又六郎/島田已久馬殿、⑧一 道成寺/右相伝致候事/大正八年十月/一噌又六郎/島田三熊殿、⑨一 安宅/延年舞/右相伝致候事/大正十三年十二月/一噌又六郎/島田三熊殿、⑩一 宝生流/安宅/延年舞/右相伝相済候事/大正十四年十二月/一噌又六郎/島田已久馬殿、⑪一 鷺/右御相伝申上候/昭和二年九月/一噌又六郎/島田已久馬殿、⑫一 皆伝/右相伝相済候事/昭和三年十二月/一噌又六郎/島田已久馬殿

D 1-2、「石橋」相伝状覚 一枚

折紙(153×365)。高田市郎右衛門より島田の師である一噌流笛方正木利三郎にあてた「石橋」の相伝覚。

【翻字】覚/一 石橋/右相伝之儀拙者取次/免状相達候迄は右/能相勤候儀差免置/候処如件/亥十一月高田市郎右衛門(花押)/正木利三郎殿

D 1-3、「一噌流習事大概」

昭和十六年に一噌鉄二の名で印刷された一枚紙(190×359)。同内容のものが十六枚。次の「免状料規定」(D1-4)と一緒に「島田已久馬殿」と記した封筒に収められていた。封筒には他に「小習一式」を記した便箋(276×171)も収められている。「一 脇能(黄渉楽・神楽)/一 初習一式(神之序・物神楽・窀・前後之替・村雨留・和合之舞・安達原一式・白頭)/一 翁(弓矢立合)/一 盤渉楽(弄鼓之楽)/一 中習一式(滝流し・大和舞・赤頭三段之舞・小鍛治黒頭・後之出留之伝・歛盃之舞・忍辱之舞・法楽之舞・神楽

留・盲目之舞・十三段舞返・現之樂・狂乱之樂・雪月花之舞・出羽二段返・酌之舞・遊曲・戲之舞)／一乱(乱掛り・乱留)／一盤渉序之舞(羽衣盤渉)／一別習一式(春(金春流)笏之舞・水波之伝・見留・八段之舞・沢辺之舞・恋之舞・重前後之替・宝(宝生流)井筒物着・羽衣彩色・宝(宝生流)ヲ除ク延年之舞・宝(宝生流)熊野三段之舞・大原御幸・砧・一調一管)／一獅子(大獅子・連獅子・望月白頭・師資十二段之式)／一奥習(卒都婆小町・道成寺・木賊・定家・鸚鵡小町・平調返・宝(宝生流)延年之舞・懺法・風流開口・姨捨・檜垣・関寺小町・乱膝行・鷺)／以上／昭和拾六年一月一噌鏝二」と印刷する。「一 奥習」の隣に「一番宛」墨書。「以上」の下に「右ニ含まれざる曲ハ其之都度ノ家元ニ問合せ候事」、最後に「島田巳久馬殿」と墨書。便箋には「昭和拾五年迄乃小習一式ノ免状ハ初中別習を含むノものに有之候」とある。

D14、「免状料規定」

昭和十六年一月に一噌鏝二の名で印刷された一枚紙(190×359)。同内容のもの二枚。前出の「一噌流習事大概」(D1・3)と一緒に「島田巳久馬殿」と記した封筒に収められていた。「脇能(入門) 金拾五円也／初習一式 金拾円也／翁 金貳拾円也／盤渉楽 金拾五円也／中習一式 金拾五円(伝授料一番ニ付金三円以上任意ノ事)／乱 金參拾円也(伝授料金拾円以上任意ノ事)／盤渉序之舞 金貳拾円也／別習一式 金貳拾円也(伝授料一番ニ付金五円以上任意ノ事)／獅子 金參拾円也(伝授料金拾円以上任意ノ事)／奥習 金貳拾円(外ニ伝授料)／以上／昭和十六年一月一噌鏝二」と印刷し、「鏝二」のところに角印。「以上」の下に「右免状ノ半額ヲ家元へ納入ノ事」と墨書あり。

D15、免状料控

謄写版印刷の一枚紙(256×181)。「免状料控へ」と記した封筒の中に収められる。奥書はないが、金額から判断して戦後の規定か。入門(五百円)・盤渉序之舞(五百円)・盤渉楽(五百円)・五段神楽(五百円)・翁(二千円)・乱(一千五百円)・獅子(二千円)・道成寺(二千円)・清経音取(三千円)等の笛の免除料を記す。「勤料別段、／一子相伝ニ三千円」と鉛筆書きあり。

D16、幸清流笛相伝免状

奉書紙二つ折り(397×520)。「幸流笛相伝免状一通」と題した奉書の包み紙内にあり。【翻字】一 幸流の笛ノ寫田三熊ノ右之者拙者流儀ノ笛取立候ニ付皆伝致候事ノ明治四拾五年ノ三月廿二日ノ幸清次郎(花押)

D17、島田熊宛幸清次郎書状

半紙(336×247)。前出の「幸清流笛相伝免状」(D16)を出すにあたっての経緯を記す。

【翻字】拜啓 陳レハ島田三熊殿事此度小生方ノ幸清流笛ト相頼ミ長く相用ヒ申度候ノ間此度御承知置被下度但シ本人承諾之ノ上ニ有之此段小生ヨリ申上置候尚委細之ノ義ハ後筆申上候以上ノ六月十九日ノ幸清次郎(花押)ノ島田龜熊殿

D2 小鼓

D21、幸清流免状料断簡

印刷物一枚(543×183)。ただし途中で切れて後欠。奥書なし。入門(五百円)・脇能(拾円)・翁三番叟(頭取脇鼓、拾五円)に始まり、クツロギ・盤渉・小習一通(一番習ヲ除ク)・中伝・奥伝・一番習・安宅延年・一調(小習)・一調(中伝・奥伝)、乱・望月・石橋・鷺乱・一調一声・一調一管・道成寺・朝長懺法・関寺小町・姨捨までを記す。姨捨以

下用紙切れ。

D22、幸清流取立免状

奉書紙二つ折り（360×494）一点。

【翻字】免状一 当流御執／心二付弟子執／立差許候者也／大正五年／四月／幸清次郎（花押）／島田殿

E 昭和期一噌流関連資料

E1、昭和二十三年 一噌流会議控

①便箋四枚（254×183、クリップ留）、②便箋二枚（255×182）、封筒（201×83）。昭和二十三年七月二十日奥書。十三世宗家一噌鏝二亡き後の流儀の方針を決定する文書の控え。宗家や宗家代理ほかの権限、伝書や免状の取り扱いなどについて記す。①清書控えと②その草稿の、二点の文書が封筒に収められる。封筒表に「昭和二十三年七月二十日／一噌流会議控」、裏には「東京市牛込区矢来町二番地／武田太加志／謳楽会／電話牛込五八四〇番」とある。

E2、一噌流家元代理心得

「昭和二十七年十一月十五日 先代喜之十三回忌追善能番組」（190×534）の裏に鉛筆書きされる。題目は「能楽笛方一噌流家元代理」。奥書なし。家元代理としての心得を島田が記したものの。余白に島田によるメモ書き（「物着ること真行草／大小ノコイ合二ツ毎ニヲキノこと」）がある。

【翻字】能楽笛方一噌流家元代理／一、先ヅ笛方は鏡ノ間にて仕手ノ面ヲ見 自分覚悟の／位イト相違アランカヲ、ケントウスベシ。／一、笛方は桂ヲ持つて居ル。／一、笛方は能一番ノ位イヲ保チ最モキンチウシテ／全曲終ルマデ油断スベカラズ。／一、右ニ付笛方ハアイライ（ママ） 笛最モ大切シテ及ビ／地方ニ受渡シノ間モ細密に研究すべし。／一、舞ハ最モ大切ナレドモシテの動作ニ付キテ／地方と同シ役目ト心得べし。気品クワンキュウ論。／一、笛のアイシライはシテノ喜怒哀楽ニ順応／スルハ勿論ナレドモ地方の発音に引渡シ／肝要ナリ。決して発音迄ノコスベカラズ。／但シ地方ダレテ活気ナキトキハ笛ニテ／引立ツコト油断アルベカラズ即ち全曲ノ／位ヒヲアズカル故ナリ。／尤も全曲の位取りはシテニ有。笛方は／是ヲ補佐する所以ナリ。／随ツテ謡ノ間取りニ最も注意シ／シテ、ツレ、ワキ、地方ニ受渡肝要ナリ。／追言。明治維新後能楽衰ビノトキ右様ナル心得／地に送り、笛大小太コ唯形丈存スル程度ノノ時期ニハ総テチグハグノ当座余興ノ程度ナリシヲ其子孫に至リテ祖父親ノ父ノ業ヲ本道ノ能楽ト心得当時其まゝノ修得し来れる者笛方ニ於テ最もハナハ／ダシ尤モ活計立チ難キ当時ニ於テハ／致し方ナカリシナリ。現今に於テハ世界ノ／能楽ニ進マンガ為笛方ハ先ヅ謡ヒ次に／大小太コヲ修得し是レに笛同調ヲ研究シテ／始メテ笛方トナルベシ。／尚笛大小太コ半役ナリ。／島田（一噌流代理）

F 型付

F1、天保11年観世流「夕顔」山之端出型付

八行箋（256×177）一枚。年記・署名なし。天保十一年九月七日御本丸御表公家衆御馳走御能組で観世太夫の舞った「夕顔山之端出」の能番組（観世太夫・新之丞・又六郎・長九衛門・三郎右衛門）のあとに、当日の演出を墨で写す。

F2、「胡蝶」キリ型付

用紙（332×242）一枚を二つ折。内題・外題なし。年記なし。「四季折々の」からクセ末まで、詞章を墨書しその右横に朱で型を記す。その上段に舞の図、最後に全体の型を鉛筆書きする。鉛筆書きは島田の筆と認められる。

F3、金春流『舟弁慶』

228×160。前付一丁。本文十二丁。ところどころに赤ボールペンで型を記す。
【刊記】大正十三年十二月 金春光太郎 わんや書店刊

F4、「花月」小歌八割譜

槌田峯夫私用の八割箋（137×400）一枚。年記なし。観世流（花月）の小歌を墨で記す。末尾に「花月の当り取調べ／候事右之如し／御聞候も色々な取方有之候／是ハ喜之師／の口伝なり／槌田峯夫／島田先生」とある。「槌田峯夫」の角印が二箇所、「草狂」の印が一箇所ある。槌田峯夫は幸清次郎の素人弟子で千田峯夫の名でも活動していた人物か。

F5、泉流・大蔵流 三番叟図解

ポケットブック（洋綴ノート、150×93）の表紙にペンで「泉流／大蔵流／三番叟図解」と打付書き。墨付十八丁。和泉流揉ノ段・鈴ノ段、大蔵流山本家揉ノ段、鈴ノ段の型などを舞台図とともに主にペン（一部、鉛筆）で記す。狂言方の所作や地の回数などが詳細。署名・年記はないが、昭和十五年一月の演能のメモも含む。「島田已久馬殿／華族会館演能会／通行券／昭和五年五月拾五日」の観劇券が挟み込まれていた。

G 謡本

G1 謡本

G1-1、「観世流謡曲大成 全」

189×130。千百五十丁。ハードカバー、箱入り。裏表紙裏に「観世宗家 有寄贈 島田已久馬」。観世流全曲、及び乱曲・三曲・三読物。書き込みナシ。「大正十三年版中形本前附補訂」と「大正十三年版中形本正誤」を印字した欠み紙（177×248）一枚あり。
【刊記】訂正者観世元滋、発行兼印刷者檜常之助、発行所桧大瓜堂刊、大正十三年。

G1-2、観世流『縮刷解説参考謡本人』

横本（152×229）。題簽に「縮刷解説参考謡本人」。表紙に二種類の印あり（薄くて読めず）。第一丁裏に「押田氏図書印」。書き込みナシ。

【刊記】大正九年二月廿日発行、訂正者丸岡桂、観世流改訂本刊行会発行

G1-3、観世流『小袖曾我』内五ノ五

227×159。前付一丁。本文十二丁。書き込みナシ。

【刊記】大正九年、観世元滋、檜大瓜堂刊

G1-4、観世流『望月』外十二ノ四

227×15。前付一丁。本文十六丁。朱でワキの詞章を訂正し、ところどころ型も記す。

【刊記】大正十四年八月、第八版、観世元滋、檜大瓜堂刊

G1-5、観世流『翁』二日

129×90。袖珍本。前付ナシ。本文三丁。書き込みナシ。

【刊記】昭和二年五月、観世元滋、檜大瓜堂刊

G1-6、観世流『翁』法会舞

127×91。袖珍本。前付ナシ。本文三丁。

【刊記】非売品、観世左近、檜大瓜堂

G1-7、宝生流『旅の花』

横本（127×193）。〈高砂〉のみ小鼓の手が朱でボールペン書きされている。

【刊記】明治二十六年二月十七日訂正出版、明治三十九年十二月廿日別製本御届、訂正者観世清廉、発行兼印刷者檜常之助

G1-8、宝生流『小袖曾我』

230×160。本文十五丁。ところどころに朱墨と鉛筆で型を記す。

【刊記】大正七年八月、宝生重英、わんや書店刊

G1-9、宝生流『芦刈』内十六卷ノ一

227×159。大正十五年二月発行、わんや書店。

G1-10、宝生流『草紙洗』外六巻ノ三

227×159。本文十七丁。書き込みなし。

【刊記】著作者宝生重英、発行兼印刷所江島伊兵衛、わんや書店刊

G1-11、宝生流『鉢木』

161×119。昭和十三年五月三日に帝国ホテルで行われた大倉・山本両家結婚披露宴と奥書にあり。一丁表に番組（シテ宝生重英、ツレ佐野巖、ワキ宝生新、亀井俊雄・幸悟朗、アイ野村万造・三宅万介）を記す。

G1-12、喜多流『熊坂』昭和改訂版

232×156。書き込みナシ。

【刊記】昭和四年六月発行、昭和八年三月再版、喜多六平太、わんや謡曲書店

G1-13、喜多流『湯谷』昭和改訂版

232×156。書き込みナシ。

【刊記】昭和四年六月発行、昭和九年十二月再版、喜多六平太、わんや謡曲書店

G2 狂言台本

G2-1、『三人片輪』

224×165。墨付十三丁。仮綴。共紙表紙の中央に曲名を打付書。〈三人片輪〉の台本を書写し、ところどころ鉛筆で型を記す。座頭の役には赤鉛筆で◎が付けられているので、島田が乱能で演じた折に書写したのか。裏表紙には墨書があり「勤了」と読める。狂言の流儀は未確認。挟み紙（土車「一天四海波」の詞章に赤鉛筆で型付）一枚（243×333）あり。狂言中の酒宴の舞として舞ったものと推測される。墨付十三丁。

H、名簿

1、社団法人能楽協会会員名簿

能楽協会に所属する会員の名簿。昭和二十七年十二月発行と翌年発行の二冊。129×187。全三十五頁。

2、全国能楽用品業協議会名簿

全国の能楽用品業名簿。229×157。名簿の後ろに附として本会関係団体、本会役員名簿、本会規約を載せる。発行年不明。